

研究・調査報告書

報告書番号	担当
171	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
題名（原題／訳）	
<p>Long-term effects of minimum drinking age laws on past-year alcohol and drug use disorders. 近年のアルコールと薬物使用障害に飲酒開始年齢を規制する法律が及ぼす長期間の影響について</p>	
執筆者	
Norberg KE, Bierut LJ, Gruzca RA.	
掲載誌（番号又は発行年月日）	
J Alcohol Clin Exp Res. 2009 Dec;33(12):2180-90. Epub 2009 Sep 23.	
キーワード	
：アルコール乱用、自然な実験、飲酒購入可能最少年齢、経済学、健康政策	
要 旨	
<p>目的： 多くの学生の早期の飲酒開始が後のアルコールの物質使用障害とより大きな危険性を含んでいることが明らかになっているが、開始年齢と物質使用障害の後の危険性の関連は不明なままである。</p> <p>方法： 我々は、‘natural experiment’ 研究デザインを用いて 12 ヶ月間の治療上と診断統計マニュアル（第4版）における有病率を 1970 年代と 1980 年代における法的に異なる飲酒開始年齢で比較した。対照は、アメリカ合衆国 1948～1970 年に生まれた、2 つの全国的に代表的な断面調査から得られる 33,869 人の回答者とした。その 2 つは 1991 年の国民の長期的アルコールの疫学調査（NLAES）とアルコールとその状態に関連する疫学調査である。分析は州、出生年齢、評価年齢、アルコール税、他の人口統計学、社会的背景要因で調整した。</p> <p>結果： 40 歳代、50 歳代の対象者においてでさえ、過去に 21 歳よりも以前にアルコールを購入する事が法的に認められていた者はアルコール摂取障害 [オッズ比 (OR) : 1.31、95%信頼区間 : 1.15～1.46、p 値 : 0.0001] や、その他の薬物使用障害 (オッズ比 (OR) : 1.70、95%信頼区間 : 1.19～2.44、p 値 0.003) で、より関連がありそうである。影響予想による有意差は回答者の性別、黒人かヒスパニック系、出生集団、年齢、自己申告での定期的な飲酒開始年齢ではなかった。さらに、影響予想は、重回帰モデルでも潜在的な可能性を調整している変数として、開始年齢を考慮しても影響はほとんどなかった。</p> <p>結論： 40 年代または 50 年代の対象者でさえ、法的にアルコールの購入が認められた開始年齢の影響は、過去の年アルコールや、その他の物質使用障害に対してより大きなリスクと関連していた。しかしながら、これらの関連は、当然、飲酒開始年齢によって説明されるものではない。その代わりに、青春期の後半での飲酒頻度や飲酒強度が成人してからの物質使用パターンに長期的に影響を及ぼすかもしれないことは、もっともなようである。</p>	